

明治初年、神仏分離の発令により、西浦十四ヶ村の虫供養組の解散、堀之内村が福養寺を、平井村が法善寺を廃し、法善寺の本尊を法海寺内の十王堂に祀り、十王堂の諸仏を本堂隣の仮堂に安置した。以後、百年の風雪のため、十王堂の破損甚しく修理が必要となった。法海寺側は、八幡区の所有だから、八幡区で、いや、もとの法善寺境内や供養田が残っているから、それを処分して修理すべきだ。という論争があって十有余年になる。結局、元、法善寺の供養田を八幡区に寄付して、それと、区民の浄財で再建することになった。

昭和五十六年三月の段階では、鉄筋コンクリートで再建ということになったが、その後、神社仏閣は、純日本風の本造が好ましいということで、木造による再建ということに変更された。(鉄筋コンクリート建て案が、木造建築に変更された経緯は、時の区長、近藤豊氏が、北陸方面への視察の折、石川県南部地区の那谷寺を参拝され、その木造建築の堂宇の印象が強く、かように変更するように申出でられたという) また、昔、十王堂に祀られていた諸仏が、仮堂へ祀られていて、そのままでは相済まない。何とか、再建して祀るべきだという声が高まり、同時に再建することになった。

再建工事の担当者は、当、中島地区で代々続いている、嘉兵衛十八代目に当る梶江時男君と決定し、九月廿七日に元十王堂の解体工事が開催された。この堂の棟札に、享和元年(一八〇一年)中島村大工、嘉兵衛再建と記してあった。現棟梁の時男君より八、九代前の人で、時男君の感激は一人であった。

また、昭和十七、八年頃、戦死者の町葬用の祭壇が時男君の父である計智氏によって、立派に作られていたが、今回、その祭壇を再建した十王堂の中央に祀る仏像の祭壇に使用した。これも奇しき因縁である。なお、両堂の格天井には、当地区を始めとして、有縁の方々、百余名の苦心になる絵や書が納められている。

さて、両堂の落慶法要は、昭和五十七年二月廿八日、素晴らしい好天に恵まれ、昭和六年八幡神社拝殿竣工の式典以来の「上棟式」の行事も催され、木遣り音頭も高らかに、七百有余の稚児行列、三千有余の参拝者の中で厳粛にとり行われた。